

第 11 回 詩人としてのワイルド紹介

(1) 詩人としての紹介

明治時代のワイルド受容としてこれまではデカダン論などからワイルドへの言及があったことは述べて来た。また、ワイルドの芸術論そのものを紹介しようという島村抱月や本間久雄を中心に行われて来たことも触れてきた。しかし、明治 38 年(1905)以後「詩人としてのワイルド」を取り上げる傾向が目立って来た。明治 41 年(1908)の平田禿木「詩人オスカ - ・ワイルド」(『東京二六新聞』6 月 24 日～26 日)、同年 9 月～10 月の岩野泡鳴「詩人オスカ - ・ワイルド」(『太陽』第 14 巻第 12 号～第 13 号)がある。また、文脈上詩人としてのワイルドを論じることになった明治 41 年(1908)10 月の野口米次郎「オスカ - ・ワイルドの復活理由」(『慶應義塾学報』第 135 号)もある。実際に詩の紹介となると、明治 41 年(1908)8 月に小林愛雄「オスカ - ・ワイルド詞華」(『帝国文学』第 14 巻第 8 号)、明治 42 年(1909)4 月に THE ACADEMY 舎生「オスカア・ワイルドの詩」(『スバル』第 1 巻第 4 号)、明治 45 年(1912)6 月に木村秋果「訳詩三篇(オスカア・ワイルドより)」(『三田文学』第 3 巻第 6 号)等がある。こうしたことは当然 *De Profundis* (1905) の出版と無縁ではないが、詩人としてのワイルドあるいは、ワイルドの詩に関する言及について紹介しておくことにする。

(2) 平田禿木

平田禿木は「英国詩界の現状」(『明星』未歳第 5 号、1907 年 5 月)の中で、ワイルドの詩は「キーツで、自らキーツを歌つて、ポエット・ペエントアである」⁽¹⁾と評している。「詩人オスカー・ワイルド」では、

元来ワイルドの詩を見るに、シエリー、ロセッチなどの行き方のものもあるが、多は、殆どキーツ其儘で、主として、キーツの狙つて居た處を狙つて居たらしい。兎に角、彼は餘程希臘文学に熟達して居たと見え、彼の詩は餘程希臘的で頗る餘裕ある鞠子であつた。⁽²⁾

さらに、

彼の作物の中には詩と、小説と、戯曲の三種を有して居るが其の中で最も秀て居たのはやっぱり詩であろうか⁽³⁾

と言及している。平田はワイルドの詩にキーツから受けた影響について論じたことが大きな特徴だろう。

(3) 岩野泡鳴

岩野泡鳴は「自然主義的表象詩論」(『帝国文学』第 13 巻第 43 号、1907 年 4 月)の中で、

英國現代の詩界では、ロセチやボウドレイルの流れを汲んで居るス井ンバーン、それから大いにサンボリストを以つて標榜するイーツやシモンズの傾向が、最も新しいのであらう。⁽⁴⁾

と言及し、「英國に及んでオスカー・ワイルドのエチスト(耽美派)ともなつた」⁽⁵⁾とワイルドについて触れている。詩人としてのワイルドについては「詩人オスカー・ワイルド」(『太陽』第 14 巻第 12 号～第 13 号、1908 年 9 月～10 月)を見てみたい。しかし、題名に反して、ワイルドの詩については多くを言及していないのである。

ワイルドの著書は既に引用した『思ふまま』、『どん底より』など論文的なのが最もすぐれてあるのであつて、詩はロセチやスモンパンの模倣に過ぎないことが云はれてある。⁽⁶⁾

さらに、「詩に於てもこれは余り感服した物ではない」⁽⁷⁾と言及している。岩野泡鳴は確かに詩人としてのワイルドについて言及もし、「詩人オスカーワイルド」といったものも発表しているが、詩人としてワイルドに目を向けていたわけでない。むしろ、耽美主義者としてのワイルドを論じるにあたり、文脈上、詩人としてのワイルドに触れているのである。このあたりが平田禿木の紹介とは大きく異なる点である。

(4) 厨川白村

厨川白村は「近英詩人の時勢に対する関係を論ず」(『帝国文学』第13巻第12号、1907年12月)や『近代文学十講』(大日本図書、1912年3月)などの中でワイルドはそれぞれ取り上げられている。後者は、「耽美主義と近代詩人」の中で取り上げられている。岩野泡鳴と同様に耽美主義者としてのワイルドを論じている中で、文脈上、詩人としてのワイルドに触れているのである。

(5) 野口米次郎

野口米次郎は「ラスカー、ワイルドの復活理由」(『慶應義塾学報』第135号、1908年10月)の中で詩人としてのワイルドについて言及している。具体的に詩の分析などは行なっていないが、「彼は人間悲劇の詩人であつて、単にサロームの作者たるばかりでは無いのである」⁽⁸⁾とか「美妙的な音楽と豊かな美な想で満ちて居る美文家」⁽⁹⁾といった指摘がある。野口のこのワイルド論は、*De Profundis*の出版を契機にしているが、詩としては‘Helas’に注目した。

(6) 本間久雄

本間久雄は日本で本格的なワイルド論を論じた第一人者である。本間がワイルドの詩も大きく取り上げたのは、「思ひより」(『早稲田文学』第56号、1910年7月)である。“Symphony in Yellow”を取り上げている。「ワイルドは、ははりホイッスラーなどと同じく『色彩の音楽家』だ」⁽¹⁰⁾と述べ、また、彼の代表的なワイルド論の「オスカア・ワイルド論」(『早稲田文学』第64号、1911年3月)では、ワイルドの詩集について言及している。

ホイッスラーが「色彩の音楽」“Colour-musician”ならば、ワイルドは確かに誰やらが云うたやうに「言葉の色彩家」“Verbal-colorist”と云うてよからう。⁽¹¹⁾

本間はワイルドの詩には、「一向にアーティシカルな半面ばかりが目立つて、現実的の分子が少なかつた」⁽¹²⁾と述べているのである。

(7) その他

ワイルドの詩を扱ったものについては、小林愛雄「オスカア・ワイルド詞華」(『帝国文学』第14巻第8号、1908年8月)、THE ACADEMY 舎生「オスカア・ワイルドの詩」(『スバル』第1巻第4号、1909年4月)、佐藤春夫「キイツの艶書の競賣に附されるゝとき」(『三田文学』第2巻第8号、1911年8月)、木村秋果「譯詩三篇(オスカア・ワイルドより)」(『三田文学』第3巻第6号、1912年6月)などもある。

小林愛雄「オスカア・ワイルド詞華」に紹介されているのは、「朝の印象」(Impression du Matin)、「アルノ河畔」(By the Arno)、「航海」(Impression de Voyage)、「小唄」(Chanson)、「幻象」(A Vision)、「慰霊歌」(Requiescat)、「伊太利ちかく」(Sonnet on Approaching Italy)の7編である。

THE ACADEMY 舎生「オスカア・ワイルドの詩」では、

Oscar Wilde を英吉利大詩人の列に加へようとする要求が危く見逃されようとして居る、といつて彼の作物が人の注目を引かぬといふのえはない、つまり抑も彼は散文家であつて、第二義に於てのみ詩人であると一般に思はれて居るからの事である。⁽¹³⁾

と冒頭で紹介されている。さらに「Wilde の最もよい詩は嘗て作られた最もよい詩と同等である」⁽¹⁴⁾とし指摘し、具体例として“*The Harlot's House*”を取り上げている。

Wilde は若い時 Rossetti 及 William Morris の作の影響を非常に受けた。その影響は彼の天才に取つて喜ぶべきものではなかつた。例えば *Ballade de Marguerite* とか *Dole of the King's Daughter* などは習得した技巧の為に殆ど parody を讀む様な気がする。厳密な韻文としては無価値である。けれども、一度眞の情緒の動いた場合には何時も彼は美しい詩を書いたのである。⁽¹⁵⁾

とも述べている。William Morris は William Morris の誤りであるが、この紹介では「かの異常な *Ballad of Reading Gaol* は心の激しい苦痛によって彼の心から脈々として打ち出されたものである」⁽¹⁶⁾との引用もある。文中では“*The Sphinx*”の引用もあるが、この紹介文の最後は、「彼は英國語の存する限り不朽の大詩人として残る人である」⁽¹⁷⁾と結んでいる。

また、佐藤春夫「キイツの艶書の競賣に附されるゝとき」は“*On the Sale by Auction of Keat's Love Letters*”の翻訳である。

木村秋果「譯詩三篇(オスカア・ワイルドより)」は「セオクリタス」(*Theocritus*)、「グレイス」(*Impression de Voyage*)、「マグダレンの逍遙」(*Magdalen Walks*)の翻訳である。

(8) 新体詩運動

ワイルドは小説家、批評家、エッセイスト、劇作家、詩人など様々な姿を持っているが、何故「詩人としてのワイルド」が取り上げられたのだろうか。明治晩年にはワイルドは批評や *De Profundis* などが紹介されていた時期である。翻訳も *Salome* はすでに紹介されていたが、詩はそれほど紹介されてはいなかったはずである。作品としては *The Ballad of Reading Gaol* (1898) は *De Profundis* が出版されると、*De Profundis* と共に注目を浴びることになる。しかし、具体的に *The Ballad of Reading Gaol* が紹介されるわけではない。では何故「詩人としてのワイルド」が取り上げられたのであろうか。ワイルドが詩人としてそれほど高く評価されたのだろうか。これには明治期の新体詩運動に注目しなければならないだろう。

まず、日本における西洋詩の受容を見てみると、明治 14 年(1881)～明治 17 年(1884)の『小学唱歌集』(初編～第三編) 明治 5 年(1872)頃から始まった讃美歌の翻訳も、明治 21 年(1888)には植村正久・奥野昌綱・松山高吉編『新撰讃美歌集』として世に送り出された。一般的に翻訳詩の成功例として取り上げられるのが、明治 22 年(1889)の森鷗外と新声社の同人による『於母影』である。その中で最もよく知られた作品は、シェイクスピアの『ハムレット』の第四幕第五場の「オフエリヤの歌」であるが、それは七五調に訳されているのみならず、日本の伝統的な詩歌の言葉使いが用いられているのであった。この背景には明治 15 年(1882)の外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎撰『新体詩抄』(丸屋善七)を忘れることができない。

三人の著者たちはいずれも新詩創成の野心的な意図をもっており、集中の『玉の緒の歌』の序言で、井上は「明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新体ノ詩ノ作ル所以なり」といっている。これは新詩の宣言であり、伝統詩と別個の詩的世界を形成するための最初の詩論だった。また「編者識」とした「凡例」中に、「此書ニ載スル所ハ、詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ「ポエトリー」ト云フ語即チ歌ト詩トヲ總称スルノ名ニ当ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ」という言葉があるが、これによって「ポエトリー」という意識による詩的概念が、はじめて日本詩の世界に導入された。」⁽¹⁸⁾

坪内逍遙の『小説神髓』は明治18年(1885)9月から明治19年(1886)4月に発表されたが、「ポエトリーの趣きをしまくほりせば、『新体詩抄』をはじめとして、…(中略)…、其一斑の趣きを得て窺ふに庶幾かるべし」⁽¹⁹⁾と、『小説神髓』にも『新体詩抄』の影響を少なからず認めることができる。「新体詩」とは「新作の詩歌」ではなく「新体の詩歌」である。⁽²⁰⁾である。赤塚行雄は『「新体詩抄」前後 明治の詩歌』の中で次のように述べている。

<近代詩>の芽生えを、外山>山、矢田部尚今、井上巽軒の『新体詩抄』に求めるのが、今日の近代詩史研究家、詩論家たちの定説である。この定説に従い、三人は従来なかった西洋風の新しい詩を日本語で創造しようとする最初の試みをなし、ここにみられた<近代詩>の芽生えを、山田美妙、中西梅花(慶応二 - 明治三一 一八六六 - 九八)、宮崎湖処子(元治元 大正一一 一八六四 一九二二)などが芸術的に前進させ、やがて北村、透谷、島崎藤村、土井晩翠、明星派の諸詩人たちが、それを<近代詩>として、はっきりと成立させた、とみるのである。⁽²¹⁾

『新体詩抄』でだけでなく、むしろそれ以前に発表された『小学唱歌集』こそ「新体詩」の事実上の発表だとも指摘している。⁽²²⁾明治時代は日本の西欧化の時代であり、それは文学・演劇も例外ではなかった。前述の通り坪内逍遙『小説神髓』が発表され、演劇界では演劇改良運動が起こった。文学界ではすでに詩の世界で短歌や俳諧・漢詩文といったこれまでの日本の伝統的な詩の体系とは異なった西洋の詩が紹介されていた。それが新体詩である。「新体詩」の大きな特徴は、17文字と31文字の詩歌の表現から、これに制限されない長詩、表現が日常語で書かれたことである。この結果として、新体詩は思想を伝えることにもなった。明治後半に「詩人としてのワイルド」が紹介されているのは、この新体詩運動と無縁とは言えないだろう。「詩人としてのワイルド」を本当に紹介したかったというよりは西洋の詩を積極的に受け入れている時代であったこと、明治後半に西洋の詩を受け入れる状況のなか、明治38年(1905)に*De Profundis*が出版され、ワイルド復活の波動が日本に届いた時期と重なることも大きな要因であると考えられる。同じ明治38年(1905)には19世紀末のフランス詩を訳した上田敏『海潮音』が世に出ていることを考えると、時代の要求を感じる。さらに明治40年(1907)頃より相馬御風(1893-1950)や川路柳虹(1888-1959)らの提唱した日常口語による自由律の詩を書く、いわゆる口語自由詩の考え方が加わり、大正6年(1917)には萩原朔太郎『月に吠える』へとつながるのである。明治時代の「詩人としてのワイルド」は、詩人としてのワイルドを高く評価したものではなく、あくまでもワイルドの紹介の一端に過ぎないということである。真の意味での「詩人としてのワイルド」の研究は昭和戦後になってようやく本格的に始まるのである。

参考資料

山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月

佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、1999年6月)

注

- (1) 平田禿木「英国詩界の近状」(島田謹二・小川和夫監修/平田禿木『平田禿木選集』第2巻、南雲堂、1982年3月), p.366.
*初出の『明星』(未歳第5号)では「英国詩界の現状」となっている。
- (2) 平田禿木「詩人オスカー・ワイルド」(『東京二六新聞』1908年6月25日)
- (3) 平田禿木「詩人オスカー・ワイルド」(『東京二六新聞』1908年6月26日)
- (4) 岩野泡鳴「自然主義的表象詩論」(『帝国文学』第13巻第43号、1907年4月), pp.415-417.
- (5) Ibid., pp.419-420.
- (6) 岩野泡鳴「詩人オスカーワイルド」(『岩野泡鳴全集』第12巻、臨川書店、1996年10月), p.31.
- (7) Ditto.
- (8) 野口米次郎「ラスカー、ワイルドの復活理由」(『慶應義塾学報』第135号、1908年10月), p.55.
- (9) Ibid., p.54.
- (10) 本間久雄「思ひより」(『早稲田文学』第56号、1910年7月), p.240.
- (11) 本間久雄「オスカア・ワイルド論」(『早稲田文学』第64号、1911年3月), pp.5-6.
- (12) Ibid., p.4.
- (13) THE ACADEMY 舎生「オスカア・ワイルドの詩」(『スバル』第1巻第4号、1909年4月), p.85.
- (14) Ibid., p.87.
- (15) Ibid., p.88.
- (16) Ditto.
- (17) Ibid., p.89.
- (18) 関良一「『新体詩抄』」(新潮社辞典編集部編『増補改訂新潮日本文学辞典』新潮社、1990年4月), p.682-683.
- (19) 坪内逍遙『小説神髓』(伊藤整編『坪内逍遙・二葉亭四迷集』日本現代文学全集4、講談社、1980年5月、増補改訂版), p.153.
- (20) 矢野峰人「創始期の新体詩——『新体詩抄』より『抒情詩』まで——」(外山正一著者代表『明治詩人集(一)』明治文学全集60、筑摩書房、1983年10月), p.363.
- (21) 赤塚行雄『「新体詩抄」前後——明治の詩歌』(学芸書林、1991年8月), p.61.
- (22) Ditto.